間苧谷　栄著

『現代インドネシア研究
——ナショナリズムと文化——』

勁草書房　1983年　382ページ

この本は，わが国におけるインドネシア研究の先達でもある板垣與一橋大学名誉教授のもとで，大学院在学中から20年あまりインドネシア研究に打ち込んできた著者のまとめの論文集である。

I

この本の目的と方法について，著者は「はしがき」のなかで次のように述べている。この本の狙いは，「対象地域の社会・文化の総体を，その個性的独自性において把握しようとする地域研究である。本書が直接の対象とするのは……インドネシアであり，何よりもまず，そのナショナリズムの動態パターンとそのメカニズムを捉えることを第一義的な目標としている」（3ページ）。

専門分化主義や文化的拘束性にもとらわれず，しかも地域的・時代的・知的局地主義に陥らぬ地域研究の方法としては，「H・ガースらによって『理念と利害の社会学』と呼ばれたウェーバー社会学の枠組を採用する。すなわち，一方で理念，他方で『利害状況』の役割を考え，両者の相関と緊張の関係を『社会層』という範疇で捉えることによって歴史の動態を明らかにしようとする枠組である」（4ページ）。

さて，この本は次のような章別構成をとっている。

第1章　地域研究の課題と方法——問題の所在と分析の視角——

第2章　C・ギアツのインドネシア研究

第3章　イスラム改革主義とナショナリズム——「サントゥリ」（ハジ・アグス・サリム）における宗教と政治——

第4章　スカルノとナッシールの政教分離論争——「プリヤイ」と「サントゥリ」の国家論比較——

第5章　ジャワ農民の価値意識——「アバンガン」における宗教意識と社会倫理——

第6章　政治文化と政治経済体制——三つの文化類型＝人間類型と政治革新——

第7章　政治過程と国際関係

第1章では，地域研究の方法論として「理念と利害の社会学」の枠組が提示されている。「理念と利害の緊張関係は，利害状況のレベルでは，『身分状況』と『階級状況』の緊張関係として現われる。社会層の概念こそ階級と身分の両概念を含み，かつ，両者を総合するものである。社会層において，『宗教的土台』と『経済的土台』，理念と利害状況，内的・心理的利害状況（信仰，宗教意識）と外的・社会的利害状況（政治的経済的利害）とが交錯し，独自のエートス，すなわち，『人間類型』をうみ出していくのである。

以上のような社会層を分析の中心に据えた全体社会把握の枠組は，いわばこの外枠としての『文化接触（アカルチュレーション）・変容』の枠組のなかに，位置づけられなければならない」（4ページ）。

そこで著者は，ギアツのジャワ研究を基本的にはそれに適う業績として高く評価し，かつインドネシア研究の出発点として，その批判的展開を図りうる積極的な意義を見出す。

第2章では，まず，ギアツの研究成果をできるかぎりギアツ自身の考え方に忠実に沿いながら彼の理論の全体的な構造を捉え，そのなかで彼の用いた概念を正しく位置づけようと努める。その結果，著者はギアツの研究成果をすでに述べたタームに則して次のように整理する。「アニミズムや呪術を中心とした基盤文化をもったジャワ社会はインド化，イスラム化，植民地化（西洋化）という一連の文化接触・変容を経験する過程で三つの『社会層』，すなわち，『ジャワ内陸部村落（ダサ）の農民層』，『ジャワ内陸部都市（スガラ）の貴族・官僚層』，『ジャワ沿岸部市場（パサール）の商人層』を形成してきた。三つの社会層は，それぞれ，独自の『宗教意識』と『選択的親近性』をもち，その『担い手』として立ち現われ，それぞれの置かれた政治的経済的利害状況のなかから独自の三つの『人間類型』（文化類型）をうみ出してきた」（5ページ）。三つの人間類型は，上述の三つの社会層それぞれに見合うかたちで，アバンガン (abangan)，プリヤイ (priyai)，サントゥリ (santri) と呼ばれる。

著者はそのような整理を踏まえて，ギアツの研究に社会変動のメカニズムの解明という点で不備を見出し，その批判的な展開，なかんずく，三つの人間類型概念の再構成を試みる。すなわち，ギアツの「文化類型（人間類

型）概念をより作業能力の高いものにするためには，『理念と利害の社会学』の立場からみて『理念』（宗教教義）→『内的心理的利害状況』（宗教意識）→『身分状況』（ナショナリズムの諸潮流としての政治イデオロギー）という関連構造に注目し，『宗教的伝統』が『政治的イデオロギー』といかに結びつくかという内的関連の構造を明らかにしなければならない」（58ページ）とした。

「第三章以下の試みは，この作業を個々の具体的事例に則して行なったものにほかならない。まず，第三章ではハジ・アグス・サリムを取りあげ，サントゥリ近代派における宗教意識と政治イデオロギーの内的関連の構造を明らかにしようとしたものである。

つづく，第四章は，サントゥリ近代派としてモハマド・ナッシール，プリヤイ近代派としてスカルノを取り上げ，両者の論争を軸にしながら，両者の比較を通してそれぞれにおける宗教意識と政治イデオロギーの内的関連をつかもうと試みるものである。

第五章はアバンガンに関して同種の作業を行なうための予備的な試みとして，アバンガン（人間類型）における『宗教意識』と『社会倫理』（価値意識）の関連を分析したものである。

第六章は以上の作業を踏まえたうえで，現代のインドネシアの政治経済体制の特質に関して暫定的な結論を下したものであり，最後の第七章はその延長上で，国内政治と外交政策がいかに関連するかを分析したものである」（58～59ページ）。

II

以上のとおり，できるだけ引用を多くして，著者自身の言葉でこの本の目的，方法，および内容について紹介したが，この本は「ギアツのジャワ研究の成果を高く評価し，それをインドネシア研究の出発点として採用し……本書全体がギアツのジャワ研究の批判的展開という形態をとっている」（4ページ）。

したがって，ここでは改めて，この本の理論的核心部分，「ギアツ研究の批判的展開」（第10節）を含む第2章「C・ギアツのインドネシア研究」の著者による要約に焦点を絞り，かつ，著者が具体的事例に則してギアツ研究の批判的展開を試みたうえで，現代インドネシアの政治経済体制の特質について暫定的な結論を下した第6章「政治文化と政治経済体制――三つの文化類型＝人間類型と政治革新――」も併せて紹介しよう。

著者が高く評価して第2章で紹介するギアツのインドネシア研究には，もっとも重要な概念として三つの文化類型が提示されている（第1節「問題の所在――三つの文化類型の特質――」）。ギアツは，「世界観，すなわち宗教信仰，倫理的選好，政治的イデオロギー」を基準にして，ジャワのシンクレティズムを構成する諸要素のうちとくにアニミズム的要素を重視する「アバンガン」，ヒンドゥ・仏教的要素を重視する「プリヤイ」，そしてイスラム的要素を重視する「サントゥリ」の三つの文化類型を提示した。また，これら三つの文化類型とそれぞれの担い手である「社会層」，換言すればジャワ社会に見出される三つの「社会構造の中核」(social-structural nuclei) たる「村落」(desa)，「政府官僚制」(negara)，「市場」(pasar)との間には，ウェーバーのいう「選択的親近性」が存在すると主張する。

ところで，上述の三つの文化類型を析出した「ギアツの問題意識と分析枠組」（第2節）はと問えば，「経済発展を社会的・政治的・文化的変動を含むより広範な変動過程の部分として検証することにより，経済合理化と結びつく社会的・文化的変動の規則性 (regularities) を把握すること」（76ページ）を基底的な問題関心として，「社会変動メカニズムを，社会体系と文化体系の非連続性 (discontinuity) に求めよう」（77ページ）とした。

分析は次の三つの手順で進められた。第1は広義の社会変動の過程を跡づけることで，社会体系のレベルでの変動過程をその四つの下位体系ごとに検討した。すなわち，「生態学的適応形態の変化」（第3節），「支配者と被支配者の権威関係の変化」（第4節），「都市の成立と発展」（第5節），「宗教の変容過程――インド化とイスラム化」（第6節）がそれであり，「三つの宗教的伝統」（第7節）として三つの文化類型を提示した。「三つの伝統の相互作用」（第8節）は，同一の問題を短期的・微視的に分析したフィールドワークの紹介である。第2の手順は，変動のメカニズムを理論的に考察する試みであるが，ギアツの試みは充分に展開されたとはみなし難いので，「ギアツ研究の批判的展開」（第10節）で検討を加える。第3の手順は，経済発展と結びつく社会的・文化的変動の規則性を追求することで，ギアツはインドネシアの事例研究を通じて，「経済発展の社会・文化的コンテクスト――ギアツの暫定的結論――」（第9節）を下した。

第9節の要旨は次のとおりである。ギアツによれば，

ジャワ社会の構造はオランダ植民地統治のもとで硬直化した。それゆえ，経済発展を考える場合にはその社会的・文化的コンテクストを考えねばならず，社会の基本構造のみならず，その根底をなす価値体系も根本的に改革されねばならないとされた。なぜならば，硬直化したジャワ社会のなかで，いかなる人間類型ないしは社会層が経済発展の担い手たりうるかと問うて，アバンガンは社会変動に対して「環境の変化に応じ，古い型に最小限度の調整を加えはするが，やむにやまれずその古い型に固執する」(113ページ)「インボリューション」的対応をとり続けているかぎり，きわめて不向きであるし，プリヤイも，国家が主導的役割を果たす大規模企業中心の管理された資本主義の経営者として，複雑な産業組織を窒息させてしまう事態を招来する可能性が高いとされた。わずかにサントゥリだけに経済発展の担い手たりうる可能性が残されているが，利己的で投機的なバザール型経済のサントゥリ商人は，持続的で集団的な企業型経済への移行に際して，企業の組織化や社会的基盤の拡大などの点で多くの限界を免れえない，とされたからである。

そこでギアツは，経済近代化と結びつく社会的文化的変動について，経済革新者集団に注目してその存在と出自，ならびにその社会的な位置づけや機能などに関する六つの命題を掲げて暫定的結論とした。

さて，問題の第2章第10節「ギアツ研究の批判的展開」である。ギアツはジャワ社会を共時的，通時的に研究して，三つの文化類型の存在と，それらの文化類型がそれぞれ特定の「社会構造の中核」と結びつくことを認めた。これに対してギアツの批判者たちは，プリヤイは社会階級であって独自の文化類型としては認め難いし，アバンガン，サントゥリの2類型についても，特定の「社会構造の中核」との選択的親近性は存在しないと批判した。著者は，ギアツの類型化が通時的研究を通じて構成した概念であること，すなわち，「ジャワ社会の構造変動過程を，三つの『社会構造の中核』の歴史的形成過程（換言すれば，社会層形成過程）を軸にして捉え，それぞれの『中核』と結びつく宗教的伝統として三つの文化類型を構成し」(145ページ)た概念であることに立脚して，上述2点に収斂される批判に反駁した。著者は，インド化とイスラム化の衝撃が，地域と社会層ごとにともども不均質であったことを強調して，批判者たちはそうした因果関連に無関心であり，ギアツの類型はより動態的で，基本的には社会変動のメカニズム分析にも役立ちうると擁護した。

しかし著者は，文化と社会体系の不連続性に社会変動の推進力を求めるギアツの理論的枠組は，具体的なジャワ社会の変動分析にどのように適用されているか必ずしも明確ではないとみた。そこで著者は，文化と社会体系の間にズレが生じた場合，新しい文化型として宗教を中心とする外来の観念が主体的に受容され，それが旧い文化を超越した「超越化のメカニズム」(mechanism of transcendentalization)として作動したとみるJ・ピーコックとT・カーシュのアイデアを援用して，ギアツの変動分析を段階移行のメカニズムとして再構成し，3文化類型とジャワの社会文化的変動の特質を究明した。

ジャワ社会が自律性を維持していたオランダ侵入前の第1期には，外来宗教が「超越化のメカニズム」として重要な役割を果たし，三つの社会構造の中核が併存した。ジャワ社会が自律性を喪失したオランダ侵入後の第2期には，三つの社会構造の中核が相互に接触を深め，そのいずれもがインボリューションを体験しつつ3文化類型が形成されたが，3文化類型はナショナリズムの勃興に伴ってイデオロギー化し，社会構造の中核との結びつきを弱めた。独立によって自律性を回復した第3期には，3文化類型が一段とイデオロギー的性格を強め，社会構造の中核との結びつきも一層弱めたので，社会統合の原理として，類似したイデオロギー的方向づけによるアリラン・システムが重要になってきた。

3文化類型がイデオロギー化し，社会層との結びつきが弱まったとはいえ，なお文化類型と社会層を結びつける分析の意義を認める著者は，3文化類型はすでに述べた再構成の方法，つづめればジャワ社会の宗教的伝統が諸々の政治的イデオロギーといかに結びつくかという内的関連の構造を究明することによって修正が可能であるし，インドネシアの他地域にも適用可能な概念であろうとした。

ではここで，現代インドネシアの政治経済体制の特質について，著者が下した暫定的な結論，第6章「政治文化と政治経済体制――三つの文化類型と政治革新――」の粗筋を追ってみよう。まず，インドネシアの2大政治文化とジャワの伝統的政治概念について，主にH・フィースとB・アンダーソンの業績に依拠して検討したうえで，現代インドネシアの政治体制を「官僚政治体制」(bureaucratic policy)と規定したK・ジャクソンの研究を紹介する。「官僚政治体制」とは，「権力と国家の意志決定への参加が，国家公務員（ナショナル・エンプロイー），なかんづく，将校団と高級官僚からなる首都の千人足らずの最上級エリート

にほぼ限定された政治体制である」（308ページ）。したがって，ごく少数の支配エリートの価値と利益とに何よりもまず反応し，大衆から遊離した政治体制なのである。しかし，インドネシアにおける「官僚政治体制」は他種の政治体制の存続に必要な制度的なインフラストラクチャーを欠き，下から脅やかすような集団もなく，大衆の政治参加を促す要因が欠けている社会で伝統的な権力概念ともきわめて適合し，現代インドネシアの社会構成原理であるパトロン・クライアント結合とも適合して体制の機能をも支え，かなり長期にわたって存続し続けている。

R・ロビソンの分析によれば，インドネシアにおけるかかる官僚政治体制の経済的基盤は，将軍や高級官僚などが経済的特権を伴う家産制的な官職を保持した「官僚資本主義」と，それに依存し，癒着する外国資本や華人資本，ならびにかぎられた民族資本の「被護者資本主義」が，「土着の小商業・小製造業」や，国営企業を中核とする「国家資本主義」を圧倒している「新家産制的官僚資本主義国家」体制であるとされる。

では，ジャワの伝統と密着したかかる体制を批判し，政治革新を図ろうとすればどうなるか。そのような試みは，これまで歴史的に次の四つの方式として試みられた。第1は，ジャワの伝統に適応し，それを利用しつつ革新をはかろうとした民族主義者の方式，第2は，ジャワの伝統を拒否し，イスラムという別の伝統によって超克しようとしたイスラム改革主義者のとった方式であり，第3は，インドネシアの伝統をすべて否定して西洋を範とする近代化を目指し，思想系譜的にはインドネシア社会党に連なる世俗的知識人のとった方式，第4は，階級を基盤にしてコミュナルな対立を越えようとしたインドネシア共産党の方式である。

いずれの方式も，それぞれ固有の問題点を抱えていた。伝統を充分に配慮しない第3，第4の方式は厳しい挫折を体験し，伝統に依存したとはいえ，第1の方式は自らが利用した伝統のしがらみから脱け切れず，第2の方式もイスラムの純化を求めれば全体社会のなかでは浮いてしまうという矛盾を抱え込んでいた。

著者は，第6章の「むすびにかえて」では，インドネシアにおける度重なる文化変容の衝撃の不均質性を重ねて強調して，今後ともインドネシアにおけるナショナル・アイデンティティーの形成がことのほか困難である点を指摘した。

III

この本は，方法論に強い関心を抱く著者がギアツの研究に注目して，その批判的展開を試みた労作である。文化人類学者ギアツによる多面的なジャワ研究の諸業績は，多くのインドネシア研究者に多大な影響を及ぼし，すでに古典的な共有財産と目されていると言えよう。そのような状況のなかにあってこの本は，ギアツの業績全体を貫ぬく理論的枠組に忠実に沿いながら，3文化類型を詳細に紹介している点で貴重である。

さらに，ともすればやや安易に個別社会における文化の自律性を強調する文化主義的な接近が試みられがちな風潮のなかにあって，地味ではあるが地に足ついたこの本の第3章と第4章で試みられたサントゥリとプリヤイに関する分析は手堅く，高く評価されよう。

最後に，次の二つの問題点を指摘しておこう。一つはインドネシア研究のみならず，ひろく発展途上国研究一般について，現在もっとも求められているのは実証研究の積み重ねであろうという認識にもとづく問題である。インドネシア全体に適用可能な類型創出を目指して，ギアツに依拠した方法論の精緻化に力を注ぐ著者の努力は多とされねばならないが，理論的な関心の過ぎたる強調は裏付けとなる実証研究との均衡をはかる点で問題が生じはしまいか。さらに，文化主義的なギアツ研究は，ともすれば個別社会の経済社会的な内生的変化の契機を軽んじがちとなり，現にインボリューション概念については実証研究にもとづく重大な疑義も表明されている。

次に，上述の論点とも関連するが，ジャワの伝統を重視する著者が，歴史的な政治革新の挫折を回顧して，インドネシアにおけるナショナル・アイデンティティー基盤形成の困難性を指摘しているくだりである。確かに指摘された諸困難は存在する。しかし，昨今「新秩序」政権の経済建設がもたらす経済社会的な内生的変化は，「世界文化」的西欧化一般の衝撃の強さと相俟って相当激しいものと看なさねばなるまい。歴史的な革新挫折の分析から類推して，将来に向けての世俗的知識人の影響力拡大と，体制批判勢力としてのイスラム改革主義者の潜勢力を過小評価することに連なる惧れは生じまいか。

幸いにして，研究環境の悪化にもめげず，インドネシアの内外に若手研究者の抬頭がみられるので，彼らの今後の実証，理論両面での成果に期待するところは大きい。

梅沢達雄（アジア経済研究所調査研究部）